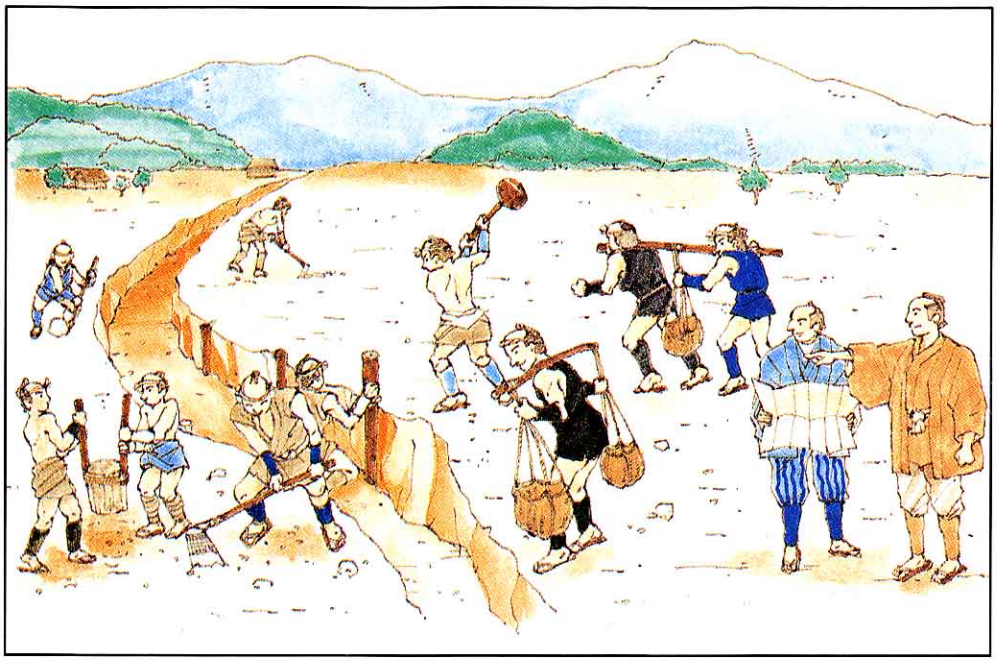
そくりょうするのに，夜，ちょうちんをぼうにくくりつけてならべ，それを遠くからながめて，土地の高さをはかったといわれています。



工事のようす

こうしてできた土田ぜきですが，1888年（明治21年）7月15日の磐梯山のふん火によって，取り入れ口から見祢まで，ばく発によって流れ出た土や石でうまってしまい，米の取れ高もへってしまいました。

その当時の土田ぜきの監守で，せきの経営にあたっていた寿田直二は，一日も早くせきをなおそうと，ねる時間もおしんで努力しましたが，1889年（明治22年）2月に病気でなくなりました。

直二のできなかった工事をひきついだのは，直二の子の直一郎でした。

直一郎は，一日も早く水田に水をとおそうと，村役人らと協力し，せきをもとどおりにつくりなおしました。

寿田直一郎頌徳碑（見祢山）